

Title	エジプト・シナイ半島ラーヤ遺跡出土にみる初期イスラム時代の染織裂について
Author(s)	井関, 和代
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 112-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53567
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

エジプト・シナイ半島

ラーヤ遺跡出土にみる初期イスラーム時代の染織裂について

井関和代／大阪芸術大学

報告者は2007年夏にシナイ半島南部・ラーヤ遺跡発掘（財・中近東文化センター調査隊）に参加し、1997年度から2007年度までに出土した染織裂・繊維の調査を担当した。本発表では、それら出土品の概要とその染織史的意義について論じた。

1. 染織出土品の歴史的背景

周知のように衣料は文化史（生活様式）の重要な要素である。染織史の分野では古代染織品の素材を地域的に区分される。例えば、ナイル河流域では亜麻、チグリス・ユーフラテス河流域では獣・羊毛、インダス河流域では木綿、黄河・長江流域では麻・絹と、それぞれの文化圏の形成をみる。

なかでも中国の絹は、古代交易最大の商品となり、中東アジアや地中海文化圏に運ばれ、その交易路「シルクロード」から、多くの染織品が出土する。

だが、発掘によって確認される染織品は土器や金属品などとは異なり、遺存する地域の風土や気候条件、とくに「雨と湿気」の影響を受けて朽ち、その出土が限られる。とくに、海上交易路の港市からの出土は僅少であり、多くが文献にもとづいて、これまで論考がおこなわれてきた。しかも、それらの技術的な記述は曖昧なものが多い。

2. 調査地ラーヤ概史

シナイ半島南部はエジプト古王国時代以来、銅などの産出地として知られ、シリア・パレスティナ地域やエジプトの諸都市との交易がおこなわれてきた。この地域に3世紀末頃からキリスト教の修道士が住み始め、4世紀初頃にはシナイ山とペトラ、エルサレムなどが

巡礼路でつながれ、その拠点のひとつとして北部紅海の港市・ラーヤが繁栄するようになった。しかし、遊牧系の人びとによるシナイ南部の襲撃が度重なり、ビザンツ帝国のユスティニアヌス帝（524-565）が、シナイ山やラーヤに近いライソウなどに堅固な修道院や教会を建立した。

ラーヤ城塞の建設時期、廃棄時期は明らかではないが、「城塞自体は6世紀頃に建設されたものであると考えられるが、出土品は9世紀以降のものが中心である……中略……城塞区はイスラーム化された段階で、それ以前の遺留品が排除された可能性が高い」[川床 2004: 3]、「ここから10世紀以降の越州窯青磁がわずかながら出土する。これに対して、9-10世紀のイラク製ラスター彩陶器、褐地緑・紫彩陶器、シリア産のガラス器、シリア・パレスティナのビザンツ・ランプなどが多数出土する。後者は明らかに陸路を通じてもたらされたもので、破片数が1万点を越えている」[川床2000: 107]と、ラーヤが「陸上交易」時代の遺跡であることが明らかにされている。

3. ラーヤ出土の染織裂について

出土する染織資料もおのずと、ビザンツからイスラームに変容する9世紀か12、3世紀の製品と考えられる。しかし、多くの布類が「ゴミ層」からの出土であり、当時であっても既に、それらは時代を経たものであった、と推察することができる。

これまでの発掘では約1,500点の染織・繊維類の出土をみるが、報告者はとくに平織布に焦点をあて、その素材・織組織・技法、組

織の密度や糸のグレードについて、調査をすすめた。平織布には亜麻、木綿、羊毛と、ほんの僅かな絹布がみられ、亜麻布はタテ・ヨコの1cm角密度に7×5～28×21本、木綿布はタテ・ヨコ、9×9～40×15、羊毛の多くは黄色に染色したタテ・ヨコ、7×6～14×36、ともしっかりと密度の変化に富む。また絹布には羽二重風合いに、藍を下染したのちにタンニン染色した興味深い黒染めが含まれる。

これらはインドやエジプト、シリア、中国などからこの地にもたらされた布の種類多さを示すものである。

また、木綿の藍蠟染め布、絹の紋織布など、当時の高価な交易品も出土している。

3-1. 藍蠟染め木綿布

インド茜 (*Rubia Tinctorum, L.*) を用いた「更紗-文様染」起源には諸説あるが、紀元前後まで更紗に関する記録はない。しかし、この頃から東西交易が頻繁となり、紀元前後のシルクロード各地遺跡から出土する木綿布や、またシリア・パルミユラ遺跡から「茜染のあと蠟防染して藍染されたインド更紗」[吉岡 1979:57]が出土し、パルミユラ出土品が現存する最古の更紗とされている。また、1世紀代の紅海・インド洋の交易事情を記録した『エリュトウラー案内記』には、当時の主要港の交易品や各地の特産品が記録され、インドからの交易品に藍や臙脂虫などに並んで、良質の木綿布ある。また同時代にブルニーが著した『博物誌』には、エジプトでインドの多色文様染色に似た製法の記述がある。

このような文献や出土品から、インド産の木綿布や文様染技術が西域やエジプトに伝播していたとされるが、その後、更紗に関する資料はなく、エジプトのフスタート遺跡(12,13世紀層)から出土をみるまでの期間を埋める更紗の資料はない。そのフスタート出土の

更紗類の中に「蠟防染して藍染された素朴な裂も発見され、それもインドで染められたという説もあるが、それについてはまだ確かなことはいえない」[吉岡 1979:57]。

この藍蠟染め木綿布と同製法の布が、ラーヤ遺跡から出土し、アジャンタ壁画の「花紋」や「法輪」に類似した文様を施したものもある。それら文様の特徴から推してイスラーム化以前のインド産の布、と考えることができる。つまり、紀元前後のシリア・パルミユラと13世紀のフスタートの空白を埋める更紗が、ラーヤから出土したということになる。

3-2. 綾織絹布

古代中国で完成された綾織は、ヨコ糸が浮き、織目が斜めの畦状になって文様を表現される、1～2色の糸で織られ、光の当たり方で微妙に輝き、文様が浮き出る。ラーヤ遺跡からは、唐代と推測できる「菱文綾織布」が2点出土している。そのうちの1点は、ヨコ糸が浮き、織目が畦状になった菱文が織り出されている。

結 び

以上のように、ラーヤから出土する染織裂は、これまで不明であった初期イスラーム期のアジアと紅海との交易を探る重要な手がかりになると、報告した。

文献資料

川床睦夫 2000「港を掘る — シナイ半島の港市遺跡」『海のアジア ②モンスーン文化圏』尾本恵市他編、岩波書店。

2004「港市ラーヤ遺跡の発掘調査」『エジプト・シナイ半島ラーヤ・トゥール地域の考古学的調査 第23次(2003年度)』3-12p, 川床睦夫編, 中近東センター。

吉岡常雄 1979「インド更紗概説」『染織の美』53-60, 京都書院。